

1部・2部 川村雅則ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ

参加学生数 1部 12名・2部 13名



川村 雅則

経済学科
教授



今年も札幌地域労組事務所を訪問してレクを受ける

新型コロナウイルス禍の学生生活等をめぐる問題 労働組合、労使関係

研修地：札幌市

●研修目的

(1) 10年目となる調査・『北海学園大学 学生アルバイト白書』づくりがパンデミックに直面した。例年は学生アルバイトの現状を中心に設計している調査内容を、コロナ禍における遠隔授業、アルバイト経験、学費負担・奨学金利用の状況、生活状況全般にまで拡張して、いわば学生生活の現状を多面的に調べた（但し、『白書』の名称は例年通りとした）。

(2) 労働組合、労使関係という視点がコロナ禍で、より一層重要になるという問題意識をもって、労働組合事務所を訪問して学んだ。その成果は、『学校で労働法・労働組合を学ぶ』にまとめた。紙幅の都合で、この研修内容は省略する。

研修先・日程

前期	ゼミをオンラインで運営しながら、新型コロナウイルス（以下、コロナ）・パンデミック下の雇用や生活保障のあり方について学ぶ。 日本学生経済ゼミナール大会（以下、インゼミ大会）の中止が決まったので、例年は2年生を中心とする調査活動を全学年で行うことを決定。文献での学習を進める。
夏季休暇	札幌地域労組の事務所を訪問して、労使関係・労働組合について学ぶ（8月17日）。 今年は、外国人技能実習制度をめぐる問題と、コロナ禍の労働相談を中心に学ぶ。伺ったお話と提供された資料を再構成して『学校で労働法・労働組合を学ぶ』をまとめる。 『白書』づくりに向けて、コロナ禍での調査の内容や方法の検討作業を開始。
後期	反貧困の実践を地域で行っている豊平教会を訪問し講話を聞く。 北海学園大学の学生を対象としたウェブアンケート調査を実施（10～11月）。調査結果を『白書』に取りまとめる。 インゼミ大会の代替として、越後ゼミ、水野谷ゼミと合同発表会を開催（12月19日）。



▲『学校で労働法・労働組合を学ぶ』

●総括

(1) 今年はウェブでアンケート調査を実施した。本学に在籍する学生およそ8千人近くに配信を行い、609人（1部436人、2部173人）から有効回答を得た。ウェブ環境が整備された者に回答が偏っている可能性も念頭におきながら調査結果をみていく（詳細は『白書』を参照されたい）。

(2) 遠隔授業等：最も多い授業開講形態は、録画した授業動画を配信するオンデマンド配信型であった。遠隔授業の課題は多岐にわたるが、学生からは、何よりも、授業課題の負担が強く訴えられた（図表1）。また意外であったのは、遠隔授業と対面授業に関して学生は冷静にそれぞれの利点を評価し、今後の授業についても、必ずしも対面授業に固執されていないことである（図表2）。

もちろんそれは、コロナ感染が懸念される状況にあることが反映している。また、繰り返すとおり、現行の遠隔授業に問題なしであることを意味しない。学生の受講環境・通信環境を整備・保障することに加えて、授業内容・教材や課題のあり方、そして、評価方法などの改良に加えて、対面でしか得がたいものを遠隔授業にどう盛り込んでいくかなどが課題である。

(3) アルバイト：コロナ禍で多くの学生が勤務シフト・労働時間数の減少を経験していた。ゼロになった者も少なくなかった（図表3）。「②勤務シフト、労働時間が減った」、「③勤務シフト、労働時間がゼロになった」、「⑤バイト先が休業した」の経験者は、重複を除くと計212人（55.5%）に達する。にも関わらず、休業手当が支給されていない。「全く支給されなかった」が半数弱に及ぶ（図表4）。

学生研修記



藤本 将行

経済学科 2年
札幌手稲高校出身

地域研修を通じて学んだこと

私たち川村ゼミの地域研修では、札幌地域労組を訪問し、副委員長の鈴木一さんから技能実習生問題やコロナ禍での休業手当をめぐる問題についてお話を伺いました。実際に争議の流れを知ることができたのはもちろんですが、違法な労働環境に遭遇したときにどのような行動を起こすことが必要であるのかを学ぶことができました。特に印象的だったのは、団体交渉の際には「誠実交渉義務」が使用者に課されており、違反すると不当労働行為に該当するということです。

また北海学園大学の学生を対象に、コロナ禍における学習の状況やアルバイト・奨学金についてアンケート調査を行いました。労働問題や学生アルバイトについての学習を日頃のゼミでしていますが、その理解をさらに深めることができました。

これらの調査結果は『学生アルバイト白書』としてまとめました。自分たちの知識にとどめるだけでなくたくさんの人が目にすることができる形にして、労働問題に少しでも興味・関心を持ってもらうことが大切だと感じました。

近い将来へ向けて

私たち川村ゼミでは、日本の労働問題や学費・奨学金問題について学んでいます。

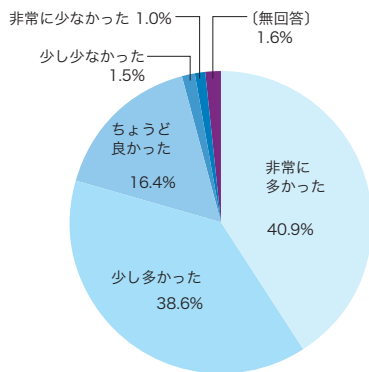
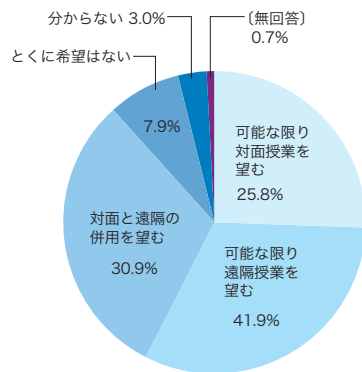
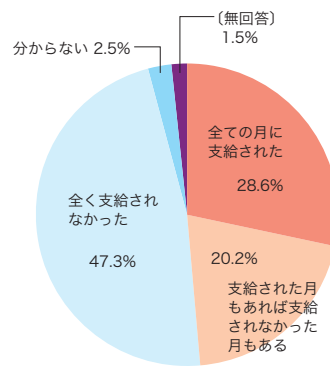
夏には、札幌地域労組の事務所を訪問し副委員長の鈴木さんから外国人労働の問題などを伺いました。今まで知ることなかった札幌地域労組ですが、お話を聞いて、なくてはならない労働者の味方である大切な場所であるということがとてもよく分かりました。自分がもし仕事で困ったときにどうしたらいいか、知らないまま泣き寝入り続けるのではなく、まずは周りに相談することや、録音や書面で証拠を残すことの大切さなど、近い将来に向けて知識を深めることが出来たと思います。

また毎年『アルバイト白書』の作成をしています。今年はコロナ渦ということもあり、授業面からアルバイトのこと、奨学金のことまで、例年とは違い、幅広い調査を行いました。非常に興味深い結果になりました。今回の調査結果から、問題の対策などを考えて、発信していきたいと思っています。



松原 美紅

経済学科 2年
北海高校出身

図表1 授業全体の課題の量に対する評価
全体=609人図表2 今後の授業の開講形態に対する希望
全体=609人図表4 勤務シフト・労働時間が減ったことに対する休業手当の支給状況
全体=203人

▼『学生アルバイト白書2020』



表4)。コロナ禍を意識したワークルール教育が課題である。なお、アルバイトの現状については、かけもちで働いている者や求職活動中の者が少なかった。

(4) 学費負担、奨学金利用：主な学費負担者・原資（一つのみ）を尋ねた設問で「奨学金」の割合が少なくない（図表5）。奨学金を使って進学・修学が可能になったことは望ましいが、一方で、日本の奨学金は貸与型（借金）が中心であり、就職後の返済負担が気がかりである。貸与型奨学金を利用している者のうち、3割（1部生では4割弱）は8万円以上、言い換えると、4年間で400万円弱を借りることになり、返済が懸念される。

経済的な状況や心身の状況（図表6）の中でも、「②学費の支払いが困難になっている」、「③生活費を稼ぐのに大変である」といった点が懸念される。報道にもあったとおり、本調査でも、休学や退学を検討する学生が確認された（図表7）。とくに、「学費の支払いが困難になっている」と回答した者で（休退学意向者が）多かった。親など学費負担者の就労収入にすでに影響が出ていることも懸念される（図表8）。こうした状況下で、学費問題に学生たちの関心も高まっている。

困窮する学生への緊急的な対応の必要性は言うまでもないが、高等教育の予算を拡充し、学習権を保障する制度設計が中長期的な課題として広く認識される状況にあるのではないかな。

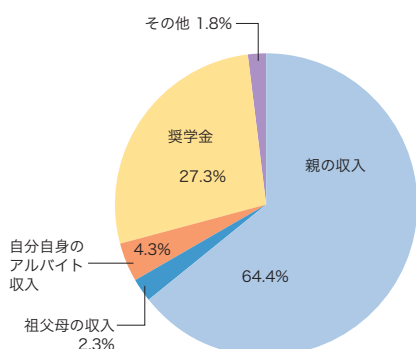
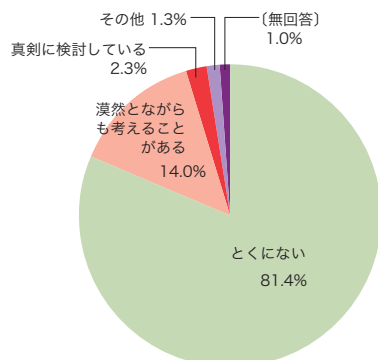
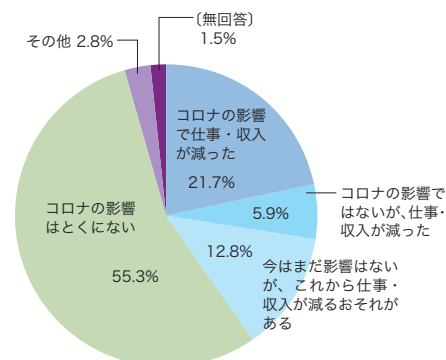
→ <http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/~masanori/index> からダウンロード可

図表3 2020年3月から現在までのアルバイトの「量」に関する経験【複数回答可】

合計【単位：人・％】	382	100.0
①とくにない	123	32.2
②勤務シフト・労働時間が減った	175	45.8
③勤務シフト・労働時間がゼロになった	70	18.3
④バイト先を解雇された	12	3.1
⑤バイト先が休業した	106	27.7
⑥バイト先が閉店した	19	5.0
⑦コロナ感染予防のためにバイトをやめた	15	3.9
⑧労働条件や人間関係を理由にバイトをやめた	17	4.5
⑨その他の自己都合でバイトをやめた	26	6.8
⑩バイトのかけもちを始めた	33	8.6
⑪その他	13	3.4
(無回答)	4	1.0

図表6 経済的な状況や心身の状況【複数回答可】

合計【単位：人・％】	609	100.0
①とくにない	124	20.4
②学費の支払いが困難になっている	48	7.9
③生活費を稼ぐのに大変である	99	16.3
④大学で友人ができない	192	31.5
⑤サークル活動や部活動に入り損ねた	90	14.8
⑥サークル活動や部活動が制約を受けており不満	103	16.9
⑦目標を見失った	104	17.1
⑧気がわからない	235	38.6
⑨体調がすぐれない	96	15.8
⑩生活リズムが乱れている	254	41.7
⑪大学生生活がつまらない	198	32.5
⑫その他	6	1.0
(無回答)	5	0.8

図表5 主な学費負担者・学費の原資（一つのみ）
全体=609人図表7 休学や退学を考えたり検討することの有無
全体=609人図表8 親など学費負担者の就労収入の変化
全体=609人

写真①②地域研修風景、講師は鈴木一さん。③教会で牧師の話の聴くのは初体験。④今年のゼミは適度な距離をとりながら。